

「ディベート」を取り入れた教育行政の授業

山口 和 宏（教育学部）

1. なぜ「ディベート」か

1993年度・94年度の2年間、大阪の相愛女子短期大学で非常勤講師として「教育原理」（前期）「教育行政」（後期）の講義を担当した。大学で講義するのはこれが初めてであったので、自分が学生として体験してきた「つまらない講義」にだけはしたくないと思い、とりわけ学生にとって馴染みの薄い「教育行政」の講義では「不登校の問題」や「単位制高校への動き」といった学生が関心を持ちやすい具体的な教育問題から教育行政の課題を考えていくことにした。教材も毎回、教育問題を扱ったテレビ番組を録画したビデオを用意し、新聞や雑誌の記事も検討の材料に使った。講義への学生の集中度もよく、自分としては「教えるべきことはほぼ教え得た」と満足して93年度の講義を終えた。

ところが、最後に学生の提出したレポートを読んで驚かされた。学生は「消化不良」を起こしているのである。どの学生も私が講義の中で述べた言葉を懸命に綴りあわせて「教育の現実と教育行政の課題」を論じている。だが、それは私の言葉を「まる飲み」し、それを吐き出しているだけであり、「自分自身の言葉」ではなかった。私は彼女たちに「消化」できないほど高度で膨大な「知識」を与えていたのである。にもかかわらず、その私の講義を理解しようと学生たちは懸命に努力してくれた。「こんなにけなげな学生になんと申し訳ないことをしてしまったのか」と背筋が寒くなった。

講義形式で一方的に「教えよう」とする限り、次の年（94年度）の講義でも学生に「消化不良」を起こさせてしまうことは確実だった。なぜなら、私にとって私が「教えよう」としている知識は教育行政の問題を考える上で欠かすことのできない「重要な知識」ばかりだと思うからである。ベテランの教師であれば講義内容をもっと絞り込み、学生のレベルに合わせた講義ができるのであろうが、二年目の私にその力はなかった。

では、どうすればよいのか？ できるかぎり「教えよう」としないことだと思った。「（教師が）教えずに（学生に）学ばせる」方法を編み出さなければならないと考えた。もし学生に自分自身で主体的に学ばせることができれば、たとえそうした学習で獲得する知識が講義によって教師の与えることのできる知識に比べて量的にも質的にも不十分な知識であったとしても、確実に学生の「身についた知識」となるだろう。「消化」できずに「まる飲み」した知識は大学を卒業すればすぐに忘れ去られてしまう。それよりは、たとえわずかな知識であったとしても「身についた知識」のほうがよい。

考えてみれば私自身、受け身的に「講義」を聞くことを敬遠して、ゼミ以外にはほとんど授業に出ない学生であった。「講義」には出席しなかったが、自分自身で本を読み、レジュメをつくり、ゼミや研究会で発表し、友人や先輩・先生方とディスカッションすることはとても楽しかった。「大学生活の悦び」はまさにこの「研究活動」の楽しさにあると感じていた。「この楽しさを彼女たちにも味わわせてやりたい！」と思った。

だが、どうすれば彼女たちに「研究活動」させることができるのだろうか？ 図書館に行ったことのない学生がほとんどである。いきなりテーマを与えて「さあ研究しなさい」と言っても、彼女たちは何をどうすればよいのか見当もつかないにちがいない。第一、彼女たちには「研究への動機」がまったくないのである。動機のないところで強制的に課題を与えて調査・研究活動させても成果の挙がらないことは確実だ。

では、どうすればよいのか？ いろいろ考え、参考文献①②なども読んだ結果、授業に「ディベート」を取り入れることにした。「ディベート」はある論題について肯定・否定にわかれ、一定のルールのもとでその勝敗を争う討論ゲームである。ディベートに勝つためには何よりもその論題についてよく知っていることが必要になる。だから、「ディベートに勝つために」という目的を与えれば、彼女たちも調査・研究活動に積極的に取り組んでくれるのではないかと考えた。また、ディベートは「視点の複数化」をもたらすことが期待できる。たとえば「学校給食は廃止すべきか？」という論題でディベートする場合、肯定・否定の立場はその人自身の考えとは関係なく形式的に（たとえばじゃん拳で）決めるから、「廃止すべきである」と考えている学生が「廃止すべきでない」立場から立論しなければならない場合

がある。「廃止すべきである」と考えている学生がその通りの立場になった場合でも、相手側がどのような主張を展開してくるか、その根拠はどのようなものかをあらかじめ予想しておくことが必要であるから相手側の視点にたって論題を考えてみるものが求められる。そこからもたらされる「視点の複数化」は、ものごとを多角的に考える習慣を養おうとする高等教育の目的にかなうものであろう。さらに、実際にディベートしてみることは人前で話す練習にもなると思われる。「教育行政」は一回生に配当される教職課程の講義であり、この講義を履修した学生は2回生になったときに「教育実習」に行くことになっている。大勢の人前で話をした経験のほとんどない学生にとっては、人前で話すことがどれほど難しいか、話を聞いてもらうためにはどのようなことに配慮しなければならないかを体験的に知るだけでもディベートする価値があると思われた。

「調査・研究活動への動機づけ」「視点の複数化」「人前で話す練習」。この3つを目的にして、94年度の教育行政の講義ではディベートを全面的に取り入れることにした。以下は、その実践報告である。

II. 「ディベート」への準備

学生にディベートさせるためには、まず「ディベートとはどのようなものか」を学生自身にはっきりわからせることが必要である。そのためには、実際にディベートしている様子を見せることが近道だ。そこで、自宅のビデオライブラリー（教育問題を扱ったテレビ番組を過去数年間にわたってそのつど録画してきたもの）からNHK教育テレビで1990年12月26日に放送されたディベート番組「青春トーク&トーク 体罰は許されるか？」を録画したテープを用意した。

次に、学生にどんなテーマについてディベートさせるか論題を考えた。学生にディベートさせる時に一番難しいのは、論題の設定である。たとえば「いじめはなくせるか？」という論題を設定すれば、「なくせない」という立場が圧倒的に有利となるからディベートになりにくい。「いじめを減らすことはできるか？」では、制度的な配慮が行き届けば現在よりもいじめを「減らすこと」ができるのは明白であるから、これもディベートにはならない。ディベートしやすく、しかも教育行政の問題を考えるのに適切な論題は何か？ 慎重に考えて選びだした論題は次の6つであった。「体罰は許されるか？」「制服は必要か？」「学校は完全週5日制にすべきか？」「学校給食は廃止すべきか？」「偏差値はなくせるか？」「すべての高校が単位制になればよいか？」。そしてこの順序でディベートさせることにした。というのは、最初のほうでディベートする学生には調査・研究活動の時間を十分に与えることができないが、「体罰」や「制服」の問題なら自分の体験に基づく知識だけでもディベート可能であり、しかも「青春トーク&トーク」でこれらの論題についてディベートしている回のビデオテープが手元にあるので、それを学生に貸し出せば「ディベートとはどのようなものか」を映像を通じてより明瞭に理解させながら論題に関する学生の知識を増やすこともできると思われたからである。他の論題についても自宅にあるビデオテープの中から適当なものを選んで教材用にダビングしておく。

さらに、論題に関する知識を学生に獲得させるために、私が切り抜いてストックしている新聞記事・雑誌記事の中からそれぞれの論題について深く考えさせられる内容を含んだものを選び出し、その論題を担当する学生の人数分コピーした（これを「基礎資料」と名づけ、まずこの「基礎資料」を読むことを学生に課す）。また、図書館へ行くきっかけを作るために、自宅のパソコンから「朝日新聞データベース」にアクセスして過去1年半の新聞記事の中から「体罰」「制服」「週5日制」といった論題をキーワードに見出しを検索し、論題別の「見出し一覧表」を製作した（この「見出し一覧表」をもとに図書館に入っている朝日新聞の縮刷版から記事そのものを探し出して、論題に関する知識を増やすことを求めるのである）。最後に、「班名簿」と「ディベート計画用紙（B4サイズの紙に「立論要旨」・「予想される相手の主張」・「それに対する尋問・反論」を書く欄を設けたもの）」を制作した。

以上の教材をすべてあわせると段ボール箱一杯になったので、あらかじめ宅配便で大学へ送っておいた。学生に貸し出すビデオ教材は、大学の教職課程準備室に備えつけた。

そうして迎えた94年度教育行政第一回講義では、授業方針を説明し、「青春トーク&トーク 体罰は許されるか？」のビデオを見せたあと、29名（4時限目〔家政学科対象〕クラス。5時限目〔国文学科・英米語学科対象〕クラスは27名）の学生を（6つの論題で肯定・否定にわかれるから）12の班にわけた。6つの論題のうち「単位制高校」についてはよく知らない学生が多いと思われたので「NHK発信基地 単位制高校の1年」（1993年4月3日放送）のビ

デオを5分間見せた。その後、どの論題を選択するか希望を出させ、重複した論題についてはどの班が担当するかじゃん拳で決めた。肯定・否定のどちらの立場に立つかも班の代表にじゃん拳させ、「じゃん拳で勝ったほうが肯定側」と機械的に決めた（こうすることで立場は自分の意見と関係なしに選ばれたことが明示され、ディベートのゲーム性が確認できる）。それぞれの班に「基礎資料」「見出し一覧表」「班名簿」「ディベート計画用紙」を入れた袋を手渡し、ディベートに向けて次のような調査・研究活動をすることを求めた。

- ①教職課程準備室に備えてあるビデオ教材を借り出して、立論・尋問・反論のポイントになりそうなところをノートにメモしながら班で見る（見る場所は図書館のAVコーナーでも学生の下宿・自宅でもよい）。
- ②袋に同封されている「基礎資料」を読んで要点をノートにまとめること。
- ③おなじく袋に同封されている「見出し一覧表」をもとに、図書館にある新聞の縮刷版から記事を探し出して要点をノートにまとめること。
- ④時間に余裕があれば、図書館（大学の図書館や近所の公共図書館）で本を借りて読むこと。
- ⑤新聞や本・雑誌などに載っている意見についてどう思うかを、親や友人、できれば小学校・中学校・高校時代の恩師にも聞いてみる。

このような調査・研究活動を終えた後、再び班で集まって「ディベート計画用紙」に「立論要旨」「予想される相手の主張」「それに対する尋問・反論」を記入して、当日どのようにディベートを進めるか計画を立てること、おそくともディベート当日の3日前までには教職課程のH先生に「ディベート計画用紙」を見せてアドバイスしてもらうこと（幸いなことに専任のH講師は私の友人で、たまたま同じ時間に別のクラスで教育行政の講義を担当することになっていたため、今回はH講師のクラスと合同で授業することにして「ディベート計画」のチェックをH講師に依頼した）、次週は休講にするが最初にディベートする班は2週間しかないので急いで準備するようにと指示した。かくして準備はすべて整い、ディベート当日を迎えることになった。

教育行政 ディベート計画用紙	ディベート実施予定日	月	日		
論題:					
班の立場: YES・NO		班名:			
班長:		班員:			

— 立論要旨（私たちの主張の要点を簡条書きで書く） —

— 予定される相手の主張 —

— それに対する尋問・反論 —

III. ディベート当日とその後の展開

1994年10月17日第4時限（家政学科対象）。学生にとっても私にとっても生まれて初めてのディベートである。黒板に「論題」と「ディベート進行表〔肯定側立論（3分）・否定側立論（3分）・作戦タイム（3分＜注——これでは長すぎることに気づいたので次回からは1分＞）・否定側からの尋問（3分）・肯定側からの尋問（3分）・自由討論（10分）・作戦タイム（1分）・否定側の最終弁論（1分）・肯定側の最終弁論（1分）・判定〕」を書き出す。ディベーターが向かい合うように机と椅子を移動して、いよいよ「体罰は許されるか？」についてディベート開始。ところが、不慣れのためであろう、肯定側からの「立論」が2分間で終わってしまい残りの時間を持て余す。否定側からの「立論」は声が小さくてほとんど聞き取れない。聴衆の学生が私語しはじめる。「尋問」「自由討論」に入っても議論が噛み合わず、ディベーターの沈黙してしまう時間が長くなる。聴衆の私語もいっそう多くなり、ほとんどディベートにならないまま終了。「ディベート審査プリント」を配布して学生全員に記入させた後、まず聴衆に挙手を求めて勝敗を判定する（勝敗は11対13でわずかに否定側の勝ち）。

「審査プリント」に記入したばかりの「勝ちと判断した理由」をディベーターも含めた学生全員に発表させ、教師（私とH講師）が講評をつける。残りの時間（約40分）で体罰に関する関係法令と法務庁の見解を紹介し補足説明する。ディベートの不成功に意気消沈して教職課程準備室に戻る。

ところが次の5時限目（国文学科・英米語学科対象）の授業では学生の個性がディベートにあったのか、肯定側・否定側ともにしっかり「立論」し、「自由討論」も議論が噛み合っただけでディベートらしいディベートとなった。聴衆の学生も全員熱心に耳を傾けている（勝敗は、否定側のディベーターが紙に書き出した「立論の根拠」を掲示して自分たちの主張をアピールしたこともあって否定側の圧勝）。これでようやく「ディベート授業」（ディベートを取り入れた授業をこう呼ぶことにする）を続けていく元気が出てくる。その後、ディベートの質は回数を重ねるたびに向上していった。その様子を、最初にディベートした家政学科の学生は次のように書いている。

私達は初回ということで、ディベートがディベートらしくなく進行され、終了したが、段々と回数を重ねるごとにディベートのやり方がみんなわかってきたせいか、模造紙に自分達の主張する点などを大きく書いて貼り出したり、論題について問題となっている部分をさらに詳しく調べてあったり、発言する声が大きくなってきいたり変化が見られ、ディベートらしく進行されやすくなってきた。相手側の予想される主張も予想してあるみたいで即座に答えられ、討論は激しくなってきた。それらを見ていく中で、もっと後の方で順番がまわってきていればなぁ、もっと詳しく調べていればなぁと自分達のディベートに悔いがあり、もう一度やり直せるものならやり直したいと思った。（家政学科 K・Y）

ディベートとその判定・講評は45分ほどで終わるので、その後の時間は毎回講義形式でその論題に関する補足説明をおこなったが、「週5日制」と「給食」のディベートの後は教室を賛成派・反対派の二つに分けて全員で討論した。すべてのディベートが終了した後の講義（2回）は、どの論題でも問題になった「社会と学校と家庭の関係」や「教育行政の仕組みと役割」について詳しく講義した。最後に＜試験に代わるレポート＞として「ディベートのためにどのような準備をし、その過程で何を学んだか」を書かせて、94年度教育行政の講義はすべて終了したのである（学生の成績評価は、「ディベート」のでき具合と＜試験に代わるレポート＞の内容を総合的に判断した）。

ディベート審査プリント

論題:

班名: 班員:

審査項目（5段階で評価し○をつける）	肯定側	否定側
①自分たちの意見が論理的に主張できていたか？	(5・4・3・2・1)	(5・4・3・2・1)
②相手チームの意見をよく聞いていたか？	(5・4・3・2・1)	(5・4・3・2・1)
③チームワークがとれていたか？	(5・4・3・2・1)	(5・4・3・2・1)
④よく調べてあったか？	(5・4・3・2・1)	(5・4・3・2・1)
⑤どちらの勝利と判断したか？	肯定側	否定側
⑥ ⑤の理由		

IV. 成果と課題

(1) 当初の目的の達成度

授業に「ディベート」を取り入れた目的は、「調査・研究活動への動機づけ」「視点の複数化」「人前で話す練習」の3つであった。これらの目的はどの程度達成されたか？〈試験に代わるレポート〉として提出された学生のレポートから最大公約数的なものを一つ選び、その全文を引用してみよう。

私のグループは私を含めて二人で、学科が同じでした。だから集まりやすく、意見もまとめやすかったです。しかし、私たちが取り扱った「給食廃止に賛成か」という課題に対して二人とも意見が「否定」であったのに、肯定側にまわらなければなりませんでした。最初は少し戸惑いましたが、早く準備をしようと思い、参考のビデオを見ることにしました。ビデオを見た後、問題点や意見を出し合い、あとはそれぞれ自分で調べ、意見をまとめてから集まることになりました。主に学校の図書館を利用し、課題に関係する本を何冊か読みました。それから問題だと思ったことや、自分の意見などをまとめていきました。調べているうちに、あらゆる問題点が浮かび上がり、そして給食にたずさわっている人たちそれぞれが不満や意見をもっていることがわかりました。そして自分自身にどんどん課題に対する興味がわいてくるのもわかりました。それから二人の調べたことや意見を照らし合わせ、さらにまとめていきました。私たちは肯定の意見だけでなく、否定の意見や指摘できるような点なども考えていました。また、指摘されるようなところも考え、それに対する反論も考えていきました。しかし、ディベートの時ここは絶対責められるだろうと思っていたところを思いっきり指摘され続け、強く反論することもできず、他の問題に切り替えることもできませんでした。判定では、「立論はよかったが、反論があまかった」と言われ、結果は負けでした。ディベートはゲーム感覚で、と言われても意気込んでいたので負けたのはくやしかったです。しかし負けたのは、調べてまとめることはできても、それをどう展開させていくかというところが欠けていたからだと思いました。物事には、良いところや悪いところがあり、それぞれたずさわっている人たちには意見があり、イエスかノーか決めることは非常に難しいことだと思いました。自分の意見を述べるだけでなく、相手の意見をよく聞き入れ、頭の中で整理・理解し、冷静に判断することが必要である、とディベートを通じてわかりました。(英米語学科 S・M)

この学生に限らず、「図書館へもディベートのことがあるまでは、ほとんど行ったことがなかったのに、何度も足を運びました」(家政学科 T・N)「図書館で本を調べたり、昔の新聞記事を調べたりしました」(家政学科 Y・Y)「図書館の2階で学校給食関係の本を三冊借りて自分で読むことにした」(英米語学科 S・C)「図書館の1階で2冊か3冊くらいの本を借りて読んだ」(英米語学科 K・M)と、ほとんどの学生は何度も図書館へ足を運び、自主的に2～3冊の本を探し出して読んでいます。また、「今まで週5日制の問題がとやかく言われていても自分には何も関係のないことだと思っていたので特に気にすることもなく見過ごしていましたが、このディベートを行うと決まった後は、ニュースはもちろん新聞などはその記事を切りぬき他の二人とそれについて意見を言いあって、活用できるものはしていきました」(家政学科 U・K)と、マスメディアから情報を集め始めた学生も現れた。さらに、「私たち二人は週5日制に賛成のほうだったのですが、反対の立場でディベートしなければならなかったのも、他の友人の意見や家族の意見なども聞きました。それで、みんなそれぞれいろんな意見があって驚きました」(家政学科 T・N)「さまざまな資料を収集する中で、一番印象に残っていることは家族と意見を交換しあった時でした」(家政学科 K・I)というように、友人や家族に意見を聞いてまわった学生も多い。ほとんどの学生はこちらが期待した以上に積極的な調査・研究活動を自主的・主体的におこなっており、ディベートによる「調査・研究活動への動機づけ」という目的は果たされたと考えてよいだろう。

学生にとって、ディベートを準備するために費やした膨大な時間は〈充実した時間〉であったようだ。ある学生は次のように書いている。

あらゆる資料を集め、その内容をまず自分が理解する。聴衆者に伝えるべき内容を切り詰め、そしてそれらをうまくまとめ、時間内に発表できるように用意する。これらの作業がどんなに手間のかかることか。この準備のためにいったい何時間を費やしたことだろう。わずか15分たらずの発表なのに、そのための用意がこんなに大へんだとは。確かに手間と時間はかかった。しかし、私は資料を自分で研究したりしているうちに給食問題についてあらゆる知識を得た。以前には全く持っていなかった知識を身につけたのである。従って、資料研究や発表文

の作成にあてた時間は、一分一秒たりとも無駄ではなかったのだと思う。(英米語学科 S・C)

では、「ディベート」を取り入れる二つめの目的であった「視点の複数化」についてはどうか？ 学生は次のようにレポートしている。

このディベートで、制服についてこんなに色々な意見があるということに気づきました。私は今まで、一つの事をここまで深く考えたことはありませんでした。私達の題は、たまたま制服についてということだったけれど、制服が必要か必要でないかという事に限らず、何に対しても考えれば考える程いろんな意見が出てくるし、見方を変えたりできるものなんだなと思いました。(家政学科 K・M)

このディベートをやっていく中で、私は一つの事に対して、たくさん、いくつもの意見・考え方があるということ、人の前での主張の仕方、自分以外の人のディベートのやり方などを学んだ。ディベートは、みんなでする、考えることに意義があり、一人で考えるよりもたくさんの考え方が見つかり、又、少し勇気もついて、いい勉強になった。(家政学科 M・Y)

体罰についていろいろ調べていると、自分の考えがなくなってきました。というのは、肯定側の予想される意見やそれに対しての否定側の意見にも納得のいくものが出てきたからです。(家政学科 S・S)

このディベートをやってみて思ったことは、どの論題にしても、どちらが正しいとは言い切れないということです。(家政学科 K・Y)

いろいろな新聞等の記事を読んでいると、今まで自分は生徒の立場で「体罰反対」と思っていたけれど、教師の立場になってみるとどうなのか考えてみると、体罰は全面的に許される行為では決してないけれども、時と場合によっては必要なこともあるのではないかと、考えが変わってきました。自分が教師になったつもりで想像してみると、どうしようもない時には手を出さないとはいえ切れないと思いました。(家政学科 O・K)

私は今まで、高校中退する子供達が信じられなかった。たった3年間、イヤなことがあっても我慢して行けば高校中退と言われるような事がないのに、どうしてやめてしまうのだろうと疑問だったが、今回の調査で、中退者の意見を聞いてみて、やめなくなる気持ちが少しわかった気がする。(家政学科 Y・M)

このように学生たちは、「何に対しても考えれば考える程いろんな意見が出てくるし、見方を変えたりできる」ことに気づき、どちらの立場にも「納得のいくもの」があるので「どの論題にしても、どちらが正しいとはいえない」と、ものごとを一方的・一面的に見ることから解放され始めている。「生徒の立場」で体罰に反対していた学生が「教師の立場」から体罰の問題を考え始め、「高校を中退する子供達が信じられなかった」学生が「やめなくなる気持ちが少しわかった気がする」ようになった。とすれば、「視点の複数化」という目的もほぼ達成されたと言ってよいだろう。

最後に「人前で話す練習」に関してはどうか？ 学生は次のように書いている。

ディベートにより偏差値について考えさせられただけではなく、人前で発表することを経験しました。人前で発表する時にどういう風に話せば相手に分かりやすく伝わり、自分の意見をうまく言うことができるかを考えさせられました。大きな声で、相手の方を向いてといった基本的なことさえ分かっていたにもかかわらず思ったように思います。人前で話すことは教師という仕事をしていく上で大事なことで、かかすことのできないことだと思います。この経験は来年度の教育実習の参考にもなりました。(家政学科 Y・Y)

今回のディベートは、教師になるための勉強になりました。教師は、多くの生徒を自分一人に集中させ、その上、意見・言葉を深く伝えなければいけないからです。あらためて言葉の難しさを知ることができました。(英米語学科 A・K)

みんなの前で“自分の意見を主張する”という場がもて、二回生になってから行く教育実習に向けてのよい練習になり、少しは“度胸”もついたんじゃないかと思いました。(家政学科 K・N)

ここに引用したレポートの他にも、ほとんどの学生が「人前で話すよい練習になった」と書いている。

以上のことから「ディベート」を取り入れる当初の目的であった「調査・研究活動への動機づけ」「視点の複数化」「人前で話す練習」の3つは、ほぼ達成されたと思われる。

(2) 予想外のメリット

「ディベート」を取り入れた授業を試みて初めてわかったことだが、この方式は教師にとってもメリットが多い。

①案ができる

あらかじめテーマと教材を準備しておけば、調査・研究活動によって学生自身が主体的に知識を獲得していくので、教師は（適宜アドバイスすることは必要であるが基本的には）見守るだけでよい。ディベート時も二回目からは司会進行を学生に任せればよいから教師は見ているのみ。これは楽である。教材の準備も、今回は初めてのことであったので学生がどれだけ資料を探し出せるか不安に思い、こちらから大量に資料を提供したが、学生にまかせてみれば予想以上に学生自身が積極的に資料を探し始めることがわかった。教師の準備する教材（学生に読ませる資料など）は最小限のものでよいだろう。

②楽しい

ディベートではそれぞれの学生の個性がよく現れて、見てみると実に楽しい。何よりも学生の楽しんでいる姿を見ることは、教師にとってもっとも楽しいことだ。

③気持ちがいい

ディベートの後は「学生の見落としている視点」や「定着させたい知識」「肯定でも否定でもない第三の立場」などについてフォローする講義を行うが、すでにディベートによってそれぞれの論題の問題点を把握している学生は講義形式の授業にもきわめて熱心に耳を傾ける。教師にとって自分の話す言葉が乾いた紙に水が染み込むように吸収されていくのは実に気持ちがいい。快感である。

また、学生にとってもディベートは当初の予想以上のメリットをもたらしたようだ。たとえば、次のように書いている学生がいる。

私は、自分で自分は進んだ考え方をする方だと思っていました。でもディベートで、どちらかの意見に分かれる時、私が選んだのはいつも保守的な方でした。どちらがいいとは言えないと思うし、私にはわからないけれど、自分の事はよくわかりました。（英米語学科 O・Y）

私は実際にディベートを体験し、自分が負けず嫌いで頑固者であることを知ってしまいました。だからこれから、この授業で学んだことを生かしながら均衡のとれた人格の形成に励みたいと思っています。（英米語学科 F・M）
「自分を知る」ということが教育の目的の一つであるとすれば、ディベートは学生に対して予想以上に「教育的だった」と言えよう。

私自身、実際に「ディベート」を取り入れた授業を始めるまでは「イヤがる学生が多いのではないかと心配していたが、学生は思いのほかディベートを楽しんだようである。

私はどちらかと言えば、他人に話すのは苦手な方で上手ではないので、自分がディベートを行う時はとてもイヤで緊張した。けれど、悪戦苦闘で終えてみると何かやり遂げたという充実した気分となった。（家政学科 Y・T）

初めはめんどくさいと思っていたけれども、いざ自分の番になるとものすごく燃えて、とても楽しかったと思います。（家政学科 T・K）

私は「学校給食は廃止すべきか」というディベートの題で討論することになったのですが、自分自身の考えと反対の「YES」側を支持することになり、初めはとてもやりにくいなと思っていたのですが、実際にディベート計画をしはじめていくと、なかなか楽しくなってきた、「相手チームに絶対に勝ちたい」という気持ちが強く、ディベート前日の夜まで電話で作戦会議したりして、今振り返ってみると、けっこうめんどくさかったけれど、結局は相手チームに勝って満足のいくディベートでした。授業が「ディベート」というゲーム形式だったので、自分が授業に参加しているという意識が高められ、また最後に全員でYES側とNO側に分かれて討論するのも楽しかったです。（家政学科 N・Y）

私は、初めてディベートを経験した一人であるけれど、とても良い経験をしたと思いました。ディベートをしていて勝ちたいと思ったし、とても自分で必死になっているのがわかり、それが心地良かったりもしたからです。私達のチームは負けてしまいくやしい思いをしたけれど、その気持ちは、けんかとかじゃなくて、自分達自身が劣っていたことにくやしい思いをしたからだだと思います。もう一度ディベートをしてみたいと思いました。（家政学科 I・T）

ディベートの結果は私達制服賛成派の負けでしたが、このディベートの授業を通して、友達と真剣にさまざま

な身近にある教育の問題を話し合う機会がもてて良かったと思います。……私はこのディベートの授業の中で自分の意見を貫く大切さ、また逆に他の意見を尊重する大切さを学びました。(英米語学科 K・K)

私は、このディベートという授業の進め方がとても気に入りました。もし、自分に時間があれば、すべての項目についても自分で調べてみたかったです。(家政学科 N・H)

こうした学生の声を受容し、さらに充実した教育を実現するためには、いくつかの課題が残されている。

(3) 今後の課題

「ディベート」を取り入れた94年度教育行政の講義は当初の予想以上の成果を収めたと考えるが、問題点もまた明瞭になった。

(i) 論題の工夫

学生にディベートさせる時にもっとも難しくもっとも肝要なのは「どのような論題を設定するか」であることはよく承知していたにもかかわらず、「偏差値はなくせるか?」という論題を設定したため「なくせない」側が圧倒的に有利になってしまった。また、今回の「ディベート授業」が終わってから入手した参考文献③(1995年2月初版)によれば、論題は疑問形表現よりも断定形表現の方が肯定側の立証責任をより明確にして噛み合った議論になりやすいようだから、この論題は断定形で「偏差値偏重はなくせる」(肯定・否定)とした方がよかったと思われる。論題のわずかな表現の違いがディベートの質を左右するのである。他の論題についても、「制服は必要か?」は「中学校の制服は廃止すべきである」に、「すべての高校が単位制になればよいか?」は「すべての高校を単位制にすべきである」などとしたほうが議論しやすかったであろう。

(ii) ディベート指導の工夫

回数を重ねるごとにディベートの質は向上していったが、一番最初にディベートする学生には必要以上に悪戦苦闘させてしまった。本番のディベートの前に、一回目か二回目の授業のなかで予備練習的に簡単なディベートを体験させておいたほうがよかったと思われる。また、「ディベート計画用紙」や「審査プリント」にも改良の余地があることを参考資料③から教えられた。

(iii) 調査・研究活動に対する指導

学生は予想以上に積極的な調査・研究活動をおこなったが、なかには調査・研究活動が思うように進まなかった学生もいたようだ。調査・研究活動の進行状況を常にチェックし、適宜アドバイスすることが必要だったと思う(だがこれは、非常勤講師として週に一度その授業時に出席するだけの私にはきわめて困難なことであり、この問題はすでに個人の努力の範囲を超えているようにも思えるが……)。

「ディベート」を取り入れた授業を実践してみて、最後に私の突き当たった問題は「制度」の問題である。もともと「ディベート」を授業に取り入れる主な目的は「ディベートのテクニックを磨く」といったことではなく、「ディベートに勝つために」という具体的な目標を与えることによって学生を「調査・研究活動」へ向かわせ、「大学生活の悦び」として私自身が味わってきた高等教育ならではの「みずから主体的に調査・研究活動する楽しさ・おもしろさ」を体験させることにあった。最後に提出されたレポートからは、ディベートに向けての調査・研究活動とディベートそのものを通じて学生たちが、①主体的に調査・研究活動することの楽しさを味わい、②自分の見方・考え方以外にも多様な見方・考え方のあることを知り、③「すべての項目についても自分で調べてみたかった」と思い始めていることがわかる。まさに学生たちは今、主体的に学ぼうとする姿勢をとって学問の「入り口」に立っていると言える。わずかに一回の調査・研究活動とディベート体験が、短大の一回生を文字通り「学ぶ生」としての「学生」に変える可能性をもたらしたのである。その可能性の可能性で終わらせず、学生たちを「入り口」からさらに「一歩」学問の世界へ進ませることができるかどうかは、今回の「ディベート授業」の「次に」どのような授業を用意するかにかかっている。ここに至って私は、高等教育の教授方法はそれぞれの授業における教員の個人的な創意工夫によるだけでなく、一つの〈システム〉として開発されなければならないことに気づいたのである。

ところが、非常勤講師である私には「次に」どのような授業を用意するかについて何の発言権もなく、他の教員たちと話し合う場すらない。今回の「ディベート授業」ではたまたま専任のH講師が私の友人であったので学生の「ディベート計画」を事前にチェックしてもらうことができたが、いつもそのような「幸運」を当てにできないことは言う

までもない。ほとんどの大学においてその授業の多くを学外から招いた非常勤講師にゆだねている現状では、学生の教育に当たる教員全員が「責任」をもって学生を指導することには制度的な困難がともない、教員が連帯・協力して一つの〈システム〉として授業を構成することもきわめて難しい。学生に対する教育の充実を可能にするような「制度」をどう創り出すか？ これこそが、最大の「課題」であると思われる。

参考文献

- ① 岡本明人著『授業ディベート入門』明治図書、1992年
- ② 杉浦正和・和井田清司編著『生徒が変わるディベート術！』国土社、1994年
- ③ 上條晴夫著『ディベートに強くなる本——これでディベート・ゲームがよくわかる——』学事出版、1995年